

本学教官執筆書籍の紹介

藤 枝 憲 二 著

性の分化と性成熟異常－分子メカニズムから臨床へ－

メディカルレビュー社、2002年、B5判、135ページ、定価4000円

伊 藤 善 也

生命体には雌性と雄性が存在し、その細やかな営みのなかで種としての生命を維持している。この連続と続く生命の連鎖のなかで「性分化」とは精子と卵子の出会いである生命の誕生から雌性あるいは雄性を獲得するまでの過程を指し、「性成熟」とは生殖可能な能力を身につけるまでを意味する。そのプロセスは傍目には整然と進んでいるように見えるが、実は生体内に、あるいは細胞内には数多くのプレーヤー（遺伝子や転写調節因子など）がお互いの微妙な関係を保ちながら、現れては消えている。

近年の遺伝子工学的手法の進歩は未知の領域であった、これらのプロセスを徐々に解き明かし始めた。遺伝子や転写調節因子を中心に性腺の形成からホルモン産生とその作用機構の異常を詳細に語った本書はそのようなプレーヤーが蠢く暗闇に光を差し込む入門書というべきものである。

著者である藤枝憲二教授がこの性分化と性成熟の世界に入り込んだ、ある意味では迷い込んだきっかけは患者さんとの運命的な出会いであった。それは医師になって5年目である。出張先の病院に感冒で来院した12歳女兒に二次性徴がなく筋肉質であることに気がついた。当時は遺伝子レベルの検索はおろか、染色体の解析すら研究室レベルでの仕事であった。その彼女からXYの核型が得られたのである。その出会いから四半世紀の後にこの本が生まれたわけで、臨床現場で得られた疑問とそれを解決する意気込みが本書となって実を結んだのである。

ページを開くと、「性の分化異常症」総論から始まって、性の決定を裏打ちする分子メカニズムやその異常がわかりやすく書かれている。さらに性の情報を全身に伝える、最終ステップのホルモン、性ステロイドが作用を発現するまでのプロセスとその病態を詳細に解

説している。目次を見ると「分子病態」とか「不活性型変異」などの分子生物学を齧ったことがないひとには難解な用語が並んでいる。しかし本書を紐解くと図表がととても多いことに気がつく。その図表は理解を助けてくれるだけでなく、臨床医が診断を進めるときに役立つものばかりである。

さて私は医師となってから小児内分泌学に携わってきた。子どもの成長を見守りながら、それを裏打ちする内分泌機構に思いを馳せている。私の経験のなかでも「性」の発達過程が障害されたときに生じる医療者と患者さん側の混乱はすさまじく大きい。新生児期から性の決定に悩まされる症例や思春期になって診断が確定したために自己アイデンティティーの確立が揺らぐ症例である。また昨今は社会的に男性として育ったが、内なる声によって女性となることを選択するような性同一性障害に悩むひとびとが社会的に認知されつつある。またそのような極端な異常ではなくても、思春期のからだの変化には誰もが戸惑いを感じる。

そのような根元的な問いに対してサイエンスという立場から道標を立ててくれるのが本書である。“性”の問題にかかわる小児科医、内科医や外科医のみならず、分子生物学に興味を持っている学生にも是非読んでいただきたい。

(小児科学講座)